

平成21年(2009年)3月3日(火曜日)

慶大 システム実用化へ

情報網寸断即カバ

大災害想定栗原で実演



情報通信網の寸断を想定し、機材を設置して行われたデモンストレーション

慶大は二日、栗原市のホテルエポカで、大規模災害で寸断された被災地の情報通信環境を即座に作り直すことができるシステム「ライフラインステーション」のデモンストレーションを行った。

システムは、インターネットを放送で提供。停電の場合、車や電話網が使用不能になった災害現場で、衛星通信システムや無線LANを用いてネット使用環境を新たに構築する。被災地住民のワンセグ対応携帯電話を利用して、行政などからの情報

デモンストレーションには、市と慶大、協力企業の関係者ら計約三十人が参加。交通網が寸断され、停電となったという想定で、慶大の研究者が数分間で機材を設置し、遠隔地との画像や音声での通信を可能にした。専

備える

門家でなくても、簡単に短時間で設定できるのが特徴という。

無線LANなど活用

同市は、IT(情報技術)と電気自動車を組み合わせて遠隔操作で移動できるコ・モビリティ社会づくりの実証実験協定を慶大と結んでいる。同市が、宮城県沖地震への対応を検討していることから、慶大コ・モビリティ社会研究センターがシステム開発に着手した。佐藤勇市長は「岩手・宮城内陸地震の直後は、被災者の状況が分からず、市の情報を伝えるのも難しかった。システム実用化に向け積極的に支援したい」と語り、導入に前向きな考えを示した。

慶大環境情報学部の村井純教授は「震災時、住民の車のバッテリーから電源を確保しても許されるのか、社会的な制度づくりが課題」と話した。